

## 登山のマナーと山の環境

静岡市内中学校

片岡さん

ぼくはよく家族と登山します。山には登山のマナーがあり、ぼくはゴミはポイ捨てをせず必ず持ち帰ること、立入り禁止区域に入らないこと、山の植物などを採取しないことなどをいつも当たり前だと思って守ってきました。しかし最近行った上高地での経験が、山でのマナーやルールの意味を考えるきっかけになりました。

上高地には、マイカー規制というものがあり、自分達の手では上高地の手前にある駐車場までしか行くことができません。上高地に入るには、バスやタクシーなど許可のおりている特定の車を利用する必要があります。マイカー規制が行われるようになった理由は、昭和十年代ごろから始まった山岳ブームによって車の出入りが多くなりすぎたためです。排気ガスがたくさん出て、自然へのえいきょうが深刻な問題になったそうです。今はとてもきれいな上高地の山の環境が損われたことがあったと知っておどろきました。五十年近くのしんぼつで、また良い環境にもどすことができたのはすばらしいことだと思えました。

また、上高地の帰りのタクシーで運転手さんから興味深い話を聞きました。テント泊をしていた女性が夜にクマにおそわれた事件があったそうです。クマの目的はテントの中にあつたレトルトカレーのパックだったらしく女性はテントごと十メートル以上引きずられました。軽いケガで済みました。この事件の後しばらくはテント泊が中止になったそうです。ぼくはこの女性が「クマに恨みはなく、むしろ申しわけないと思う」と話したというのが印象的でした。雨が続いて食料不足だった時に、人間の食料の味を覚えたクマとの共存は難しいと聞いた、と女性は話していました。上高地にはクマだけでなくサルもたくさん生息していて、ぼくも実際サルにそうぐうしました。サルは目の前を通りすぎてもこちらには興味はない様子でした。ぼくは食べ物をあげないというルールをてっぺいしているからこそ、サルが人間に興味を示さなかったのではないかと思いました。動物が人間の食べ物に依存してしまうことも、山の中の生態系を崩す原因になり環境を変えらることになるのだと気がつきました。

ぼくはこの上高地での経験から改めて自分が山で守っているルールやマナーの意味を考えました。ぼくは、山のマナーというものは人が安全に登山をし、登山者同士がお互いに気持ちよく過ごすためのものとしか考えていませんでした。しかし本当は山の環境を守るためのもの

のでもあることに気がつきました。例えば湿原などによくある本道やロープは、人がぬかるんだ道を歩かなくてもいいようにや道の外に落ちないように作ってあると思っていましたが、湿原の植物をふまない、環境を変えないという人にも植物にもやさしいものだと分かりました。

また、ぼくが好きな山のマナーの一つに登山道のゆずり合いがあります。登山道ではすれちがいの際に、一方が立ち止まってもう一方の人が通りすぎるのをまつというおもいやりのあるマナーです。このマナーも実は環境にやさしいマナーではないかと思えます。登山道はせまいので、お互いに道をゆずらなければ道の外に広がって歩くことになりません。そうすると道のはしや道の外にある植物がふみあらされてしまいます。上高地では、たくさん車が来たせいで環境がこわされました。道の外に広がって歩くのも同じことだと思います。自分にとっては一回その植物をふんだだけでも、みんなが同じようにマナーを守らず、百人ふんだら百回、千人ふんだら千回その植物はふまれます。みんながふみあらした場所には植物が生えなくなり、登山道が広がります。山にとっては小さなことかもしれないけれど、これも環境はかいてはないかと思えます。

人が入るとどうしても山の環境は変わります。自分が一回とってやったことが環境の変化につながります。だからクマにおそわれた女

性は「申しわけない」と言ったのだと思います。しかし上高地がマイカー規制で回復し、テント泊が再開しているように、山には自然の回復があります。一人一人が環境にはいりよする意識をもち、自分が自然に与えるえいきょうをできるかぎり小さくすることで環境を変えない努力ができると思います。

ぼくが登山を通して学んだマナーや考え方は、様々な環境問題にも当てはめることができると思います。これからも山以外の場所でも環境にはいりよして行動していきたいと思えます。